文学的文章　心情・人物像の捉え方

次の図画の時間に、先生は採点のすんだぼくらの「夕焼け空」の絵を、パラパラめくりかえしながら言った。
「おまえたちは町の中で育って、自然の景色を知らないんだな。夕焼けがどんなかもわからんやつがいるとはなァ。先生の田舎は霞ガ浦のそばで、じつにもうきれいな夕焼けなんだ」
なんだか、ぼくらに話しかけたって仕方がないといった口ぶりだった。そして、ヒョイと一枚の絵を抜きだして、教壇の上に紙芝居のように立てて言った。「どうしてこうなるのかねえ?」
前の方でだれかが笑ったのをきっかけに、①教室中にワァと笑いがおこった。ぼくも首をのばしてみた。机にのりだして、眼をこらした。それはぼくの絵だった。
先生は、その絵がだれのものとも言わなかった。すぐ引っこめると一緒に重ねて裏返し、順々に返しはじめた。ぼくは返された絵をすぐに二つに折り、四つに折り、八つにたたんでポケットにねじこんだ。先生はなにもいわなかった。ぼくは動転しながらも、②クラスの連中の手前、名前まで公表されなくて、やれ助かったと思った。なにをどうまちがえたのか、ぼく自身はまだわからなかったが。笑った連中がみんな一目でわかったほどのまちがいで、しかもそれは、算術の計算や書取りをしくじるのとはまるでちがう、了解しがたいほどあわれなことらしかった。
貼りだされた絵をみると、みんな下の方が赤く、上の方が青く塗ってある。「だれなんだい、あのサカサマの絵をかいたヤツは?」とだれかが大声で言うのを聞いて、③ぼくの顔はまるでオレだよと白状しているみたいに、みるみる赤くなるのが自分でよくわかった。

(小沢信男「昼と夜の境い」筑摩書房 による)

心情・人物像の読み取り

文学的文章で心情を捉えるためには次の内容に注目する。
① 「誰の」心情か(主語)
② 「誰・何に対する」心情か(対象)
③ 「どんな」心情か(心中)
心中は直接書かれるだけでなく、会話、動作、表情、情景描写に表れることも多い。
(例) 目を丸くした。思わず体をのけぞらせた。
→驚きなど
進む先にはどんよりとしたくもり空が広がっていた。
→憂鬱など

また、登場人物ごとの人物像を理解しておくと、物語の展開が捉えやすい。
・人物の設定(年齢・性格・職業)
・人物がおかれた状況・境遇
・人物の価値観や考え
などに注目して読み進めるとよい。

例題

――線部「どうしてこうなるのかねえ？」とあるが、このときの「先生」の心情として適当なものを選びなさい。

ア 自分の常識とは異なる「夕焼け空」の絵を見て、子どもたちの感性に驚いている。

イ 自然にはありえない「夕焼け空」の絵を見て、子どもたちが自然を知らないことにあきれている。

ウ 霞ガ浦の夕焼けのきれいさに比べ、町の夕焼けが気味の悪いものであることに困惑(こんわく)している。

〔　　〕

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「教室中にワァと笑いがおこった」とあるが、何に対して笑っているのか。適当なものを選びなさい。

ア 先生が、生徒たちが自然の景色を知らないことに小言を言ったこと。

イ 前の方のだれかが、うっかり先生が見せた絵に対して笑ってしまったこと。

ウ だれかがかいた夕焼けの絵が、色づかいのまちがったサカサマの絵だったこと。

〔　　〕

(2) ――線②「クラスの連中の……助かったと思った」とあるが、クラスのみんなに笑われた絵が、自分がかいたものであることに気づかれたくない「ぼく」の心情が、行動に表れている一文を探し、その最初の五字を答えなさい。

(3) ――線③「ぼくの顔はまるで……自分でよくわかった」とあるが、このときの「ぼく」の心情として適当なものを選びなさい。

ア 自分の絵がけなされたことについての怒(いか)り。

イ 自分がまちがった絵をかいたことへの恥(は)ずかしさ。

ウ 自分を理解してもらえないことに対する悲しみ。

〔　　〕